

総 括

小峯 和明

立教大学の小峯でございます。

ただ今、講演していただいた小島孝之先生が、立教大学から東京大学に移られ、その後に私が国文学研究資料館から立教大学に移りました。資料館には11年間勤めましたので、今回が品川での最後の開催ということで、感慨深いものがあります。お疲れのところ恐縮ですが、若干時間をいただきまして、総括のご挨拶をさせていただきたいと思います。

今回「手紙と日記—対話する私／私との対話—」というテーマを掲げましたが、昨年までとずいぶん趣きが変わりました。たとえば、昨年度が「表象と表現」という抽象的なテーマでしたように、曖昧でどういう内容でも対応できるゆるやかなテーマがずっと続いていました。それに比べて今年は具体的に踏み込んだテーマ設定に変わって、果たして応募者がどの程度集まるか心配しておりましたが、昨日と今日の2日間、非常に充実した発表が続いて大変興味深く伺うことができました。

手紙と日記という分野は、古代から近現代を貫く通時代のテーマでありまして、発表をいろいろ伺っていて、その根本には実際の時空間に限らず、心や精神の旅の文化があるということも改めて感じました。手紙と日記というと、一般的には文学作品の基礎資料や作家に関する情報として受けとめられやすく、それに基づいて作家の創作の源泉を探る作家論とか、作品の形成や時代環境をうかがう二次的な資料として扱われるようにみなされていますが、しかし今回ご報告がいろいろありましたように、それ自体が解読されるべき文学テキストとしてあり、その意義を正面から対象化し、究明されるべきものであることがはっきり浮かび上がってきたと思います。

ドナルド・キーンさんが述べておられますように、特に日記は海外と比べて日本文学においてきわだった特徴的なジャンルでもあるわけです。たとえば今回の発表で目立った問題としてあげられるのは、昨日のセッションもそうでしたが、日記と紀行文との関わりの深さですね、旅の記録との関連がひとつの大きな問題としてあるように思われます。旅の記録はおのずと日記というかたちになる、旅には原体験としての日記という媒体が必然化するといってもいいですが、同時に旅は国や地域の内外を問わず異文化との出会いであり、日記が日常性を脱して、非日常的なものを抱え込んでいく動きとしてあり、特に表現がきわだってくるように思えます。

昨日の金学淳さんの『馬琴日記』における異国認識の問題も併せ、川邊雄大さんの東本願寺の上海別院における活動の日記、あるいは顧偉良さんの井上靖とシルクロードにおけるメモの問題などに通底します。異文化との出会いがまず大きな問題としてあることが指摘できるかと思います。

また第二に、本日のセッションで展開されました1940年代から50年代という戦争体験の問題があります。クレアモント康子さんの渡辺一夫の戦中日記や、ウルシュラ・ステイチェックさんの原民喜の日記、あるいは棚町知彌さんの戦時下の能楽の問題などさまざまありましたが、非常時の体験を後世に伝えようとする記録性の意識が私的なものを公的なものに転位させるところに、書く主体が深くかわるよう思われます。ひろい意味での歴史叙述といってもよいでしょう。小島さんのご講演の中世の場合もやはり同様で、ある種の危機意識が書くという行為を必然化させていると思われます。

郭南燕さんのジブシーローズ伝なども、50年代の占領期に関わる問題でもあり、手紙の引用論としても非常に興味深いもので、引用は対話の問題でもあることを再認識させられます。日記も手紙も私と他者の対話であり、他者といっても決して対象とする相手だけではなく、他者としての自己との対話でもあるわけで、特に日記は内なる自己に向けられつつ、同時に常に第三者に読まれることも意識せざるをえないものですし、手紙は特定の相手に向けられているよ

うでいて実は自己にも向かっている、書くという行為が避けがたくはらむ表現の本性とってよいでしょう。公的私的を問わず「あらわす」という書記行為の本質的な問題がそこにあるでしょう。

林相珉さんの小松川事件に関するご発表も、在日コリア問題を通して日本と韓国の対話の問題にも発展していきだらうと思われます。デニツァ・ガブラコワさんの大庭みな子論は、まさに漱石の『夢十夜』との対話の問題であり、これはパロディの問題にも繋がるわけで、日記と小説との往還にもひろがるかと思ひます。また、楊暁捷さんは合戦絵巻を使って、絵画化された手紙と物語本文との関係を論じられ、媒体としての絵画の意義やテキストとイメージの相関、相乗とずれをめぐる興味深いお話でした。これも絵画と言葉の対話といえます。さらには一時期はやりました記憶の問題もあり、記憶の重層のあり方も深くかかわっているかと思ひます。

手紙や日記を通して、作品と作品との対話との問題が今回いろいろ出てきましたが、エルキン・ジャンさんのご講演の『源氏物語』のトルコ語訳のように、翻訳もやはり対話の問題になるでしょうし、小島さんの講演でも中世における神や仏、超越的なものとの対話があるように思ひます。

私がかかわっている研究で少し私的な話題になって恐縮ですが、私なりに日記と手紙といわれてすぐさま連想されるのは、明治から大正、戦前に活躍した南方熊楠であります。和歌山県田辺市にある「南方熊楠顕彰館」が昨年オープンいたしまして、南方熊楠が後半生住んだ屋敷と蔵書や彼の書き残した資料の一切が田辺市に寄贈され、熊楠顕彰館という資料情報センターが発足しました。私もその蔵書や資料調査に関わりましたので、宣伝を兼ねて述べさせていただきますが、熊楠という人は周知のように、夏目漱石や正岡子規、幸田露伴と年齢が同じで、明治の年号と歳が同じです。いわば明治近代の始発期の新しい学問を起こした、特に熊楠の場合は人文学と自然科学を股にかけて包含した巨人の一人であります。この熊楠が残したもので、特に注目されるのが日記と手紙です。受信したものもあわせて残された手紙は膨大な量がありますし、日記も昭

和16年に亡くなる年まで書き続けています。

ちなみに熊楠という人は終生一度も勤めたことが無い、つまりサラリーをもらったことがない典型的な高等遊民ですね。同時に反アカデミズムを貫いた人でもありますけれども、そういうことも関わって、今日のような研究論文の体系性とか完結性とか、そういうスタイルを一切拒絶した形で文章を書き続けた。要するに基本が対話・問答でありまして、特定の人物に宛てた長大な手紙に熊楠の本領が最も発揮されているといえます。もう返事が来ないうちから第二信を書き続けたりして、手紙のやり取りが非常に錯綜していくわけです。たとえば柳田國男との往復書簡は平凡社ライブラリーで2冊本になっているぐらいで、特定の人の手紙の分量が半端じゃないところがありまして、まさしくそういう意味でも、対話の人といってよいと思います。

ですから論文を書くときも基本は対話であり、誰か特定の人の説に対する意見や批判、反論として書き、まったく完結を意識していない。後から資料を見つけてはまた継ぎ足していくというスタイルで、体系性や完結性を忌避しているとしたか思われぬ。それが反アカデミズムにつながるわけですが、常に対話を基調に文章を紡ぎだし、思考を展開した人といえます。特に手紙という媒体を通して非常にダイナミックに文体が躍動するわけで、かなり誇張したほら吹き的な戯れもありまして、いろいろ書かれた論考も対話の発想から成り立っています。そういう意味でも南方熊楠が書いたものは、人文学と自然科学の横断という今日的な問題にあわせて、我々が身につけてしまっているアカデミズムに準じた学問のあり方を見直すのに、ちょうどいい対象になるのではないかと考えております。

ということで、今回の研究集会は日本文学における普遍的な日記と手紙の意義をさまざまに見直す、いい機会になったと思います。今回で戸越での国際集会は終わりますが、ご案内のように実に31回を重ねてきました。要するに31年たったわけで、資料館が発足して35年ですから、今あちこちで国際集會が行われるようになりました中でも本当に老舗の国際学会でして意義深いものがあり

ます。

また来年から立川で新たなスタートを切って開催されるわけですが、昨日の国際研究集会の委員会で、来年度のおよその計画をまとめましたので簡単にご報告しておきます。開催時期は例年と変わりがまして1ヶ月早まる可能性があり、10月の11・12日、土・日曜になります。今までの木・金曜では何としても参加しにくいわけで、学生は授業がありますし、教員も休講にしばらくの環境ですので、なるべく週末にしてほしいと要請しまして、土日開催にこぎつけることができそうです。特に来年は『源氏物語』一千年紀ということで、『源氏物語』に関するイベントがあちこちで始まっておりまして、この資料館でも10月に『源氏物語』の特別展が予定されており、それにあわせる形でこの国際集会も開催されることとなります。

というわけで、国際研究集会のテーマも、『源氏物語』そのものではちょっとつきすぎということもあり、少しずつ形で「物語の過去と未来」というタイトルに決まりました。『源氏物語』に代表される古典の物語文学に限らず、ひろい意味でのナラティブな「語り」「物語り」も含めて、通時代のジャンルや地域を越えた「物語」を、新たに捉えかえす場になればと思っております。「物語」という語彙はすでに『万葉集』からありまして、日本人には本当になじみのある、ゆかしいことばの一つです。たとえば商品名にもいろいろありますね、缶ビールの「冬物語」とか、傑作なのは生ごみの袋で「生ごみ物語」というのがあります。どんな物語かわかりませんが、とにかく、そのように記号化されるほど「物語」という言葉は浸透しておりますので、そういう問題もあわせて、ひろく検証できる場になることを期待しております。

以上、ご挨拶のことばとさせていただきます。また来年、新しい会場でお集まりいただければと思います。

どうもありがとうございました。